

# 落とし穴

はるにれの会

山本 奈緒

「おかべえー。」

という、子どものかわいい声が聞こえました。A幼稚園のそばを通りかかった時のことです。もう一度、その子は大きな声で先生の名まえを呼んでいました。「岡部」と呼ばれたその先生は、背が高く若くて、はつらつとした男の先生、つまり保父さんです。岡部先生は、

「なんだよう」

と、にこにこしながら親しげに子どもに話しかけ、そばにいたお母さんにもにこにこしながらあいさつをしています。

す。何だか、見たくないものを見てしまったような気がして、私は足早に幼稚園の前を通りすぎました。

A幼稚園は、この附近では、たいへん進んだ幼稚園と言われています。鼓笛隊や音楽教室をもち、勉強を教える幼稚園が多い中で、この園は遊びを中心とした保育を掲げ、子どもたちを自由に遊ばせ、その中から個性を引き出そうという教育目標で保育が行なわれています。子どものやることには、あまり口出しをせず、自分たちで作ったグループを生かし、なるべく子どもにまかせよ

う、子どものやる気が出るまで待とうという方針で園が運営されていると聞きました。在園の子どもたちだけでなく、卒園していった子どもたちも「子ども会」という形でめんどろを見て、地域の子どもの遊びりに貢献しようとしています。同時に親たちの教育も行なわれているようです。講演会がしばしば開かれ、

「細かいことに、あまり口出しをしてはいけません。子どもの個性がつぶされます。子どもは本来、内部にすばらしい個性と可能性を持っています。なるべく親は口出しをせずに、待ってあげましょう。何時間かかってもいいではありませんか。小さなことはあまり気にせず、子どもに自由を与え、大きな目で子どもをとらえていきましよう。そして、子どものよいところを見つけ、ほめてあげましょう。」

というようなお話がされる、と聞いています。親たちのサークルもたくさんあり、みんな仲良く助けあっているようです。

それだけ聞くと、とてもすばらしい理想的な幼稚園な

のです。そして実際にそのとおりに実践されているようですから、先生方の御苦労もたいへんだらうと思えます。実は、私は、その幼稚園から来る子どもたちを受け入れる側の学校にいます。どんな個性豊かな自主的な子どもたちが来ることだろうとお思になるかもしれませんが、

ところが、ところがなのです。その幼稚園から来る子どもたちは、一様に目がおどおどし、自信がなく、悪いことをしてしまわれると、ごまかしたり言いのがれをするか、黙りこんで石のようにかたく心を閉ざしてしまうのです。中には元気な子もいますが、落ち着きがなく、先生や友だちの話が聞けず、いつもバカさわぎをしています。そして、子どもらしい無邪気なところや一生懸命になることが少なく、どこかさめていて大人のミニチュアのような感じのところが多いのです。その子どもたちがそういう性格だから親がA幼稚園を選んだのか、A幼稚園で育ったせいなのかは、私にはわかりません。けれども、現在の学校のかずかずの問題点を差し引いても、

A幼稚園が目ざしている子ども像とはおよそかけはなれていると言っていると思います。

その子どもたちの親は、たいへん教育熱心ですが、決して勉強をおしつけるのではなく、むしろ勉強は二の次で、低学年のうちには遊ばせようという方針です。もちろん子どもの良いところをたくさん見つけて意図的にほめたり、道徳的なことや情操教育にも熱心です。子どもにさまざまな体験をさせるため、日曜日や夏休みにはいろいろなところに連れて行ったり、キャンプなどに参加させたりしています。子どもを理解しようといっしょにけんめいで、比較的子どもの教育についての知識も豊富で、考えもしっかりしています。すばらしいお父さんお母さんなのです。ところが、どのお母さんも、自分の子どもが思うように育たなくていらいらしています。いったいなぜなのでしょう。

私も教室で同じような経験をしました。子どもたちは、何も言わなければ、とにかく落ち着きがありませ

ん。授業で考えを深めるなどというのは、およそ遠いことのように思えました。少しきびしくすると、子どもは能面のように表情がなくなり、石のように固くなりま

す。何とか口を開いてもらおうと、冗談を言ったり興味の持てるような学習内容を工夫したりして態度をやわらかくすると、たちまち教師の心の中までずかずか土足で入ってきます。先生をあつというまに友だちにしてしまい、節度がなくなりま

す。私もはじめは、子どもたちとなれ合うことが子どもたちと話し合っていることのように思われ、にこにこしていました。子どもの気持ちをつかみとり、子どもを傷つけないように気をつかいました。

ちょうどA幼稚園の岡部先生のように、子どもとのかべをとっばらってしまいました。小さな事にこだわらずに、子どもを自由にさせ、私に心を開いてくれるのを待ちました。けれども、なれあって、子どもと仲良くなっても、決してその子どもの本心を引き出したり、やさしさや真剣さを見ることができませんでした。むしろ、子どもたちは、坂道をころげおちるように荒れ始め、無気

力やいじめの温床を作っていたのです。いじめや集団万引が発生したのも、ちょうどその頃です。私がいらいらしてしかると、今度は悪意の目と共にかたく口を閉ざしてしまうのです。子どもをあるがままに理解しようと努力し、子どもたちになるべく自由を与え、個性を尊重し、子どもたちが気軽に話し合える雰囲気を作ったのになぜだろう……新任教師で金八先生を目ざしていた私は、深い森に迷いこんでしまいました。自分の考えそのものに、どこか大きなあやまりがあるのだろうか。それとも現在の学校教育に問題があるのだろうか。どうすれば本当の子どもの姿を引き出し、健全な成長を促すことができるのだろうか、わけがわからなくなってしまいました。ただ一つわかっていたことは、何かがちがうという勘のようなものだけでした。迷いは数年続きました。

ところがある日、大きなヒントになる出来事がありました。娘が中耳炎になり、耳鼻科へ行った時のことです。待合室に入ったとたん、大きな声とともに男の子が

目の前を走りぬけました。五歳ぐらいのその子は、待合室を運動場のようにして遊んでいたのです。

「やめなさい。」

という、やさしくもなくきびしくもない機械的な声が聞こえました。見ると、その子の母親らしい人が、文庫本から目を離さずに注意をしたようでした。子どもは見向きもしません。再び文庫本から目を離さずに、「やめなさい。」という機械的な声がしました。子どもは、あいかわらずです。そういうことが五回ほどくり返されたあと、お母さんは、やおら立ち上がりその子のところへ行くと、

「何回言えばわかるの！」

と、どなって、突然その子をぶったのです。大きな泣き声が、待合室中に響きわたりました。おそらく、五回の注意の間、お母さんはがまんのがまんと重ねていたのでしょう。冷静に「やめなさい。」と言って、子どもがやめてくれるのを待っていたのだと思えました。決して文庫本がおもしろかったのではなく、人前もあることだ

し、子どもをしかる姿を見られるのもいやだったのです。よう。いえ、子どもに言ってきたかせるのがめんどうだったのかも知れません。どちらにしても、その母親は、五回の「やめなさい」の間、たいへんいらいらしていたのだらうという事は、最後の爆発で容易に想像することができました。ところが、子どもの立場に立っていると、お母さんがそんなにいらいらしているとは気づきようがありません。よっぽど母親の顔色を見ながら暮らしている子を除いては、機械的な「やめなさい。」の連続では、本当にやめた方がよいのだとは感じなかったと思います。それどころか、お母さんの怒った声が聞こえないのですから、半分承認されて遊んでいると思っただけかもしれません。それなのに、突然の怒声とひら手うちです。子どもにとっては、おそらく何をしかられたのか、なぜお母さんが突然怒っているのかわからなかったと思います。五回の注意の間にお母さんのボルテージが上がっているとは夢にも思っていなかったのですから。

もし、一回目の時、子どもの目を見ながら真剣に、

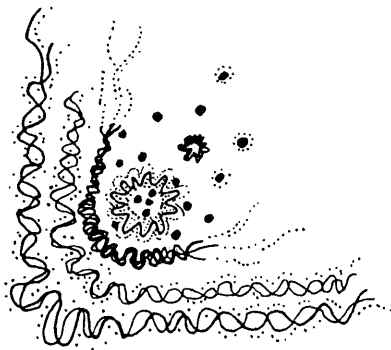
「みんなの場所だから静かにしようね。いっしょに本でも読みましょう。」

と言っていたら、たとえ展開は同じだったとしても、子どもの心への響き方は違っていたらうと思います。

何だか、見えてきたような気がしました。私も同じことをしていたのだと……。集団の中では静かにし、他人の迷惑を考えるというような「大人にとってごくごくあたり前」のことも、子どもには、その都度教えていかなくはならなかったのです。「あたり前のことができない。」とただしかってはいけなかったのです。そのたびごとに約束を確認していかなければならなかったのです。その約束が、あやふやなまま、子どもの自主性？を待たせていても、大人のストレスがたまるだけです。それどころか、子どもは、大人の感情的な怒りの爆発に自信をなくしていきます。いったい自分は、どうすればよかったのか確信が持てないからです。そして次第に子どもの口は固くなっていきます。本当の声が出せなくなり、ギャグを言ったりふざけたりというところでは異常なまで

に明るく大きわぎをするのに、ひとたびまじめな話になると、口をつぐんでしまうのです。だって、子どもたちは、何をどう答えていいか自信がないんですから。自分が適当に言ったことにも真剣に言ったことにも、ただほめるばかりであったり、突然火山の爆発のように怒り始めたり……。大人の気まぐれにどう対処すればよいのかわからないのです。

大人には、「子どもにも教えこむ」のではなく、社会を見て「気づいてほしい」という期待があるのかもしれない。もしかしたら、「戦争中の迷いもなく教えこむ教育」や「暗記偏重の教育」への反発が、その期待を生み出しているのかもしれない。しかし、大人の背中を見て、いつか気づいてくれるだろうという期待には、限界があります。最低限のルールは、くりかえしくりかえし教えていかなければ、子どもは自信を無くすばかりです。子どもの自主性や自由にだけまかせていたら、子どもたちには、行動のよりどころがなくなってしまいます。



もし、私たちが、ルールをはっきり知らないスポーツに、とび入りで参加させられたらどうでしょう。およそのルールはわかっているけれども、確かなルールを教えてもらわないで参加して、果たして自信いっぱいになれることができるでしょうか。正しいルールを学び、そのルールのもとで何回も練習し試合に臨んでこそ、自信もつき個性も発輝できて、向上心もわくというものです。あやふやなルールの中で、努力もしてないのにほめられ（自信を持たせようとはめてくれるのです）自分のプレーがいいか悪いかもわからずただちやはやされて、ある日突然「何回もやってるのにまだ気づかないのか。」と感情的に言われたら、私はさっさとそのスポーツから手を引くでしょう。でも、人生というスポーツでは、そうやすやすと手をひくわけにはいきません。となれば、だんまりを決めこむしかないわけです。A幼稚園の子どもたちが、どこかおどおどし、話をごまかし、バカさわざするのがわかるような気がしました。

それがわかってから、まず私は、子どもたちに正しい話し方を教えていねいに指導していきましました。こういう場合には、こういう話し方があるというようなことを、折にふれ説明しました。時には、泣きじゃくる子にも、無理矢理話をさせることもありましました。その結果指名されて黙りこむ子は一人もいなくなり、次第に自分を表現するようになりましました。また、こんなこともありましました。クラスに自家中毒の子どもがいました。その子が吐いた時最初は「オエー」と言って逃げ回る子が大半でした。私は吐物を片付けながら片付け方を説明し、「オエー——」という声を出してはいけないという最低限のエチケットを静かに教えました。翌日、再びその子が吐いたという知らせを受けて教室へ行ってみると、きれいに片付けていました。片付けた子どもを、みんなの前でほめました。その子どもたちは、片付け方を知ること、ただ気持ちが悪く「オエー——」と言っていた自分の気持ちのりこえたのです。のりこえた喜びとともに先生にほめられたのです。その日から、その子どもたちの目は輝

き出しました。自信がついたのです。自信は、大人がただはげましたりほめたりしてつくものではないのだなあとしみじみ思いました。何かつらいことやいやなことをのりこえた充実感があって、そこでほめられてこそ、初めてついていくもんなんだなあ、なあんた大人と同じだ、と遅ればせながら気づいたのです。今までは、子どもがのりこえなければならぬほどの無理は要求してこなかったなあと反省しました。

翌日、自信をつけた子どもの数がまた増えました。子どもたちの目は、日に日に輝き出し、はっきりと正しいことを話すようになってきました。まじめがバカにされる風潮の中、やっぱ子どもは、まじめに自分をのりこえることに喜びを感じるのだという素朴な発見に、熱くこみあげてくるものがありました。多分、ここから、自主性も個性も可能性も芽ばえてくるのでしょう。

最低限のルールや基本的な練習のやり方を教え、とにかく試合に参加させるところまでは親や教師の仕事です。そこから悩み苦しんで自分らしさを見つけ個性を発

揮していくことが子どもの役目です。そうなった時、大人はもう口出しをせずに子どもにまかせ、反則でピッと笛のふける、目の肥えた審判になればいいのです。「個性の尊重」「子どもの自主性にまかせる」「よいところを見つけてほめる」という表現をさまざまなところで目にします。けれども、この美しい言葉の裏には、大きな深い落とし穴がひそんでいるのです。